

公開講演

インド仏教史の新たな視点

現代仏教学にパラダイムシフトは可能か

佐々木 閑

今日はこういう非常に貴重な場に呼んでいただきまして、学生さんも来るし偉い先生方も来るし、両方を満足させろという、そういう大変難しい課題をいただきました。時間は一時間、これも大変短い時間なんです。普通言いたいことを言うのにはだいたい五時間位かかるものなんですけれども、それをなんとか一時間にまとめてお話をしようと思えます。

好きなことをしゃべっていいと言われました。仏教学の難しい話、細かい文献学的なことをお話してもおもしろくない方もおられるでしょう。かといって、仏教学の大まかな概論についてお話をしたのでは、ここにおられる偉い先生方は満足できない。ということ、どの聴衆の方たちにも、あまりなじみのない話をすれば、ちょうど真ん中でいいんじゃないかと思ひまして、それでこのようなタイトルでこのような資料を作っていました。インド仏教史の新たな視点とはいうものの、別にこれはこうだからこんな新しいことがいえる

という学説を発表しに来たわけではございません。そうではなく、今からインド仏教史を勉強しようという方がおられた場合に、こういう視点でやるとおもしろいことが見つかるかもしれない、という一つの提案をするためにこういう資料をもってきたわけです。

この問題はパラダイムシフトという一つのキーワードで考えてみようと思っております。パラダイムシフトというのは、はや流行り言葉なので、これを使うとかえってなんだが俗な感じもしますけれども、しかし、これは現実に存在する現象であって、我々はこのパラダイムシフトということを考えない場合に、学問を飛躍的に発展させることはできないだろうというふうに思っております。ですから、今日はパラダイムシフトというのがいかに大事なものであるかということ認識していただくのが一つの目的であります。

シフトとは転換です。あるものが別のかたちに変移してい

くこと、これがシフトですね。パラダイムというのは、これは日本語に直せないからパラダイムという単語を使っているのであって、日本語で説明するのは大変難しいですが、一般の視点とでもいうのでしょうか。みんながこうだと思い込んでいる、あるいはみんながこうだと共通して承認している価値観、あるいは世界観、視点とつよつよなものもパラダイムというふうにいえるのではないかと思えます。したがって、パラダイムがシフトするということとは、みんながこうだと思っていることが、実はそうではないということかたちで他の視点へと変移することを意味するわけです。ですから、これはただらだと時間の流れにそって漸進的に少しずつ変わっていくものじゃありません。視点が変わるといふのは、これももうある一瞬で変わるわけですから、パラダイムシフトというのは長い歴史の中のある結節点、つまり、決まった時間のときにだけ生じてくるものです。つまり、点と線を考えた場合の点にあたるわけですね。

このパラダイムシフトは昔からいろんな分野でさまざまに行われてきたものです。誰かがしようと思つてするわけじゃない。むしろその時代に沿つて、たまたま運のいい人がその場に居合せて、何かをやる、発見する、あるいは發明する。それがその本人の思惑を離れて、その時代全域の人々の視点を變えてしまつ。そういう現象ですね。そういうものがある

んな分野に起こってきたらうと思えます。で、その点と線との間の線の部分というのは、そのパラダイム転換によつて起こつた視点の變化、それに應じて、後は着実にその視点のもとに情報なり知識なりが蓄積され、そして多くの学説が積み重なつていくという、そういう期間ですね。それがまた、次のパラダイムシフトがきますと、そこまで積み重ねたものがまた、もう一つ上のレベルへ、さらに包括された別の視点へと移つていくという、そういう動きをするものだらうと思えます。

これは口で言うよりも、例を挙げたほうがいいたらうと思つて、いくつかそこへ例をもつてきたわけなんです。これ見ていただければ、だいたいどういふものがパラダイムシフトがお分かりになると思えます。

例えば、デカルトですね。デカルトといふとなんだか難しそうなんです、要するに僕らが中学校や高校で習つた x 軸と y 軸の上に $v = ax + b$ を置くこと直線になりますとかあるでしょう。あれがデカルトがやったことです。あれは考えてみますと、 x 軸と y 軸は全部数字です。1とか2とか 3.5 とか、全部数字です。ところが、その上につていふのは図形です。丸とか三角です。もし学校で座標軸を習わなかつたとしたら、そういう座標軸上の図形を想像しようとしても、皆さんの頭の中にそんなもの浮かびますか。たぶん僕らの頭の中には丸

や三角はこっちに浮かんでるし、こっちには $\infty + \infty = \infty$ とかそういう数式が並んでいる。まさかそれを一緒に考えることができるなんて、思いもしないはずですね。それを一緒に考えなさい。二つの違った世界をあなたの頭の中で一つに融合させて考えてもらいなさい、といわれるわけですね。できないですよ、それは。それを可能にしたのがデカルトです。

つまり、あのx軸y軸というマイディアによって、図形の形をそれぞれの数字に一つずつ直すことができる。例えばこんなくねくねくねくねした曲線が数字で表せるという非常に画期的なものです。ところが私が今こっちやって話をすると、なんのことはない、そんなことみんな知ってることじゃないかと思う。これはなんでかという、パラダイムシフトによってデカルトのときに変わった、その視点を僕らが受け継いでいるからです。したがって、デカルト的なこのパラダイムシフトが無かったら、いまだに我々はそういう世界観をもつことができない。だから、デカルト以前とデカルト以後とは、人間の考え方そのものに変化が起こってるわけです。デカルトはそこまで大きなことは自分で考えていなかったはず。彼は、一種の趣味としてやってたわけですから、まさかそれが人類全体にそういう視点の変化をもたらすなんて思いもしなかったはずですが、それが実際起こっている。そして、それ以後とそれ以前とは数学の本質が大きく変わってくる。

例えば、こないだ中国の有人宇宙船がありました。宇宙船が飛ぶのはある図形を描いて飛ぶわけですよ。月までいくのか、地球の周りか知りませんが、ある図形を描いて地球に戻ってくる図形です。それをすべて数字に表すことができるからこそ、計算をして、どういうスピードで、どういう燃料をいつ燃やせば、その宇宙船が無事地球に戻ってくるか全部わかる。これはデカルトの考え方がなかったら、成り立たないものです。言われてみるとなるほどと思うけれども、あまりにもこのパラダイムシフトの結果が、我々の心に染み付いているものですから、当たり前のごとくよっくに思ってますね。

こればかり言っていると五時間たってしまつんで、先へいきます。二番目のニュートン、これはもちろんご存じですよ。微積分およびニュートン力学の創成です。あのリンゴが木から落ちて、地面に落ちるのを見てニュートンがはっと気がついたっていうのは嘘ですけども、あの話はとてもいい話です。なぜならば、あのときに関わっているものは、リングと地球です。つまり、リングというのは我々の日常にいつもあるもの。地球というのは、これは宇宙を飛び回っている天体。そのリングと地球の間に一つの法則性がある、両方がつながっているというあの話は、非常にいい話だと思つんです。つまり、リングが動くその規則と、地球や月が動くその規則は、実は一つだ。リングも地球もすべてのもので

動も、ある単純な規則によって言い表すことができるという考え方ですね。これも言われてみりゃ当たり前なんです。でも、それまではだれも考えもしなかったことです。だいたいそれまでの月や地球の動きっていうのは、あれは神様が創った一つの法則性によって動いている。それに對してリンゴが落ちるっていうのは、これはまた別で、人間世界のことだ、アダムとイブの世界だと思われていた。それが実は全部一つの法則性でつながっていることが証明されたということ、これは画期的なことであつたわけですね。これも、まあ当たり前すぎてあんまりおもしろくないですね。

ダーウィンは面白いです。ダーウィンのパラダイム転換はやっぱり一番影響があつたんじゃないかなと思います。もちろん進化論の提唱ですね。進化論の提唱によって何が変わるのかというと、もちろん聖書にもとづく世界観が崩れるということ。ヨーロッパの人たちにとってはこれ極端にシヨッキングなこと、従つてこのダーウィン説というのは受け入れるまでにものすごく時間がかかる。ダーウィンが生きている間にはまだ定着しないんですね。それぐらい時間がかかつて、しかもダーウィンは周りの圧力に負け、この『種の起源』を第三版第四版と出版するにつれて、だんだん学説が穏やかになっていってしまうんですね。ですからダーウィン自身でさえも抵抗しきれなかつたくらい、外界から、つま

りキリスト教世界からのさまざまな圧力がかつたわけですが、それでも負けずになんとか進化論がこうやって市民権を得ることによって、パラダイム転換が起こります。

これは実はインド学にも関係してゐるんです。アーリア人のご存知ですね。紀元前何年か知りませんが、二千年か三千年かにアーリア人が中央アジアかどこからインドへそしてイランへ、そして地中海世界、つまりヨーロッパの起源となるところへと一斉に侵入した、と言いますよね。本当かどうかしらないけど。ともかく、ある一民族が長い何千年という時間の間にユーラシア大陸全域に広がつて文化圏を構築したという話ですね。これ、ダーウィンの『種の起源』が出るまでは、そんな説はなかつたんです。あの、インド・ヨーロッパ語族、つまりインドの言葉とヨーロッパの言葉が実は同じ系統の言葉であるということは、もうすでにそれよりもずっと前にウィリアム・ジョーンズによって発見されていまして。だから普通に考えれば、ヨーロッパの言葉とインドの言葉が同じ言葉で、従つて同じ民族であるならば、当然一つの民族がどっから出てきてヨーロッパもインドも全部侵略したという説がすぐに出てきてもおかしくないはず。しかし、『種の起源』が出版されるまでは、そんな説は誰も唱えてないですよ。なんでだかわかりますか。聖書によると、この地球が始まつたのは紀元前四千年ぐらいだそう。そして、ア

ダムとイブが出てきて、そして出エジプトがあり、イスラエルの土地にユダヤが辿り着き、そしてさまざまなきことが起こってという時代配分をすつと足していつて現在までもつてくると、その中にどこにもアーリア人という民族が何千年もかけてユーラシア大陸に広がったという、その現象がはまる場所がないんですね。聖書の歴史の年表の中には、したがって、アーリア人という民族がインド・ヨーロッパ全域の言葉の発生源らしいということがわかって、民族が移動して全体に広がったという説につながらないです。その間に聖書というハードルがあるからどつしても越えられない。したがって、『種の起源』が出て、そうじゃないんだ、生物は聖書のようなかたちで発展したのじゃなくて、もつと何万年も何十万年もかけて少しずつ進化してきたものだという説が受け入れられて初めて、年表の中に隙間が出てくるわけです。そして、その隙間の中にアーリア民族の発展という項目が初めて入ってきます。ですから、そのアーリア民族の広がりという現象が認められたのは、今から百数十年前の話です。『種の起源』が出てからあとの話ですね。これなんか、まさかダーウィンはそんなことまで考えてないですよ。俺の進化論によつて、このアーリア人侵入説が認められる、なんてそんなこと知りもしなかったはずですが。ひとつのきつかけによつて視点が変わること、次々にいろんな分野でみんなの視点

が変わっていく。これがパラダイム転換の非常に重要なポイントなんです。

このダーウィンの話はまだまだあるんですけど、これもちょっと飛ばします。一時間ですよ、この講演。多少の延長はいいそうです。この調子だといつ終わるやらわからない。インド仏教の視点までいけないかもしれないですね。

四番目のカントールも、これもおもしろいですよ。簡単に言うと、小数と分数はどっちが多いかっていつ話です。そんな馬鹿な質問するんじゃないって言われるかもしれません。小数はいくつあるんでしょ。無限にありますよ、いくらでも考えられるから。分数はいくつあるでしょう。分数の数だつて無限に考えられるよ。三分の一も、五分の一も、百二十万分の三十五でもなんでもいいです。どちらも無限にあるのに、カントールという人はおもしろいこと考えますね。どちらが多いんだろう。そんな馬鹿な、無限にあるのに数の大小が比べられるはずがない。ところが、このカントールさんはこれを証明してしまう。小数が多いんです。分数は無限にある。小数も無限にある。しかし、小数の方が多くなんです。僕はなにもだましてるんじゃないけど。しかも非常に簡単な証明でこれを決めてしまふ。今日はちょっと黒板がないから、できませんけども。これは我々の頭の中に無限という概念を一個のかたまりのようにしてすぱっと入れるきつ

かけになりました。僕たちは頭の中で無限なんていうのは普通に考えています。当たり前のことだと思っている。世の中に無限というものがあると思っている。無限という存在があると思っている。しかし、無限という概念は、そんなもの昔はないですよ。ギリシャやエジプトの数学みて、そこに無限という概念はどこにも見当たらない。あの有名なユークリッドの証明で、素数は無限にあるという証明があるんですけども、素数は無限にあるなんてユークリッド一言も言っていないですね。ある素数があった場合に、それよりも必ず大きい素数が存在すると言っています。わかりますか。それは無限ということじゃないかと思つかもしれませんね。ところがギリシャ人の頭の中には無限という概念がないから、それゆえ無限である「という、そういう言葉は絶対に出てこないわけです。無限ということが我々一般人の頭の中でごく普通に扱われるようになったのは、このカントール以後の話です。そんなこと言われても思うかもしれないけど、実際そうだからしょうがない。僕らはすべてパラダイムシフトのいろんな色に染まって今現在ここに居るわけですから、当たり前のことだと思っているものが、遡って考えると、それはある時期から始まったことであるというのはたくさんあります。実は今日、仏教について言いたいのは、そういうことなんです。我々が仏教で当たり前だと思っっているようなことが

実はある時期から言われるようになったことであって、決して最初から当たり前のこととして存在していたわけではないという、それが実は今日の話の眼目なんです。

五番目のポアンカレも面白いですね。三体問題、つまりどういふことかという、太陽と地球と月があった場合に、それらがどう動くかということとです。太陽と地球の二つだけの場合なら簡単ですね。止まっている場合には引力の法則があるから、お互いにくっついてきて、ぶつかります。後はまあ反発してびよんびよんするよね。あるいはそれが運動量をもつて、つまり動いているときはどうなるか。動いているときには、ぐるぐると永遠に回り続けます。これは簡単です。これは僕らも物理学で、高校の物理でやったことです。じゃあ球が三つあったらどうなるんだ。実はこれは解けないんです。球が三つある場合には、お互いがお互いに影響を与え合うから、ある球とある球が引き合っって近づく、その影響が三つ目の球に影響を与えて、三つ目の球がちょっと動きまわると、動くとその動きが今度は二つ目の球に影響を与えるから、また二つ目が動くというふうで、お互いの関係がぐちゃぐちゃに網の目のようからまって、結局この三つの球は最終的にどうなりますかという答えは出ないんです。で、その問題を解こうとしたのがこのポアンカレという人ですね。この人はまだコンピュータのない時代に、すべて頭で計算をす

る時代に、その複雑怪奇な計算を解いて、その中から今ようやく我々がコンピュータを使ってつくり出したフラクタル数学というものの元を作ってしまった人です。これはもう本当の天才的な仕事なんです。今なら、コンピュータでおそらく一分間でできるような計算でしょう。何百万回という計算。ポアンカレはそれを何百万回もするんじゃない、インスタントに結果が出る方法を自分で発明して、それによって結局どういう動きをするかということを明らかにした。結論をいうと、ある領域の場合、絶対にこの三つの球は、拡散しない。つまり球が一個だけどこかにいってしまつてということはなくって、常に三つが共存しながらぐるぐる回ります。回りますが、ただし、一度たりとも元の同じ状態へ戻ることはないという。そんなことつてあるのかしら。あるんですね、そういうことが。全体の状態は変わらないのに、その中にある三つの球は、いつもその中にあるんだけど、一度たりとも絶対に同じ状況にはならない。必ず違う状況で動いているという。つまり、閉じた系の中で一つの無限に多様な動きをする、というのを見つけたわけですね。しかも驚くべきことに、その無限に多様な動きの中に、美しい規則性が秘められているのを見い出したんです。これなんか、これ全部今コンピュータに應用されていて、例えばですね、映画の『マトリックス』にはたたくさんのCGが使われていますが、あの

CG画面が本物そっくりに見えるのは、全てこのフラクタル数学をコンピュータの中へ放り込んでいるからです。つまり、フラクタルというのは、現実の世界そのものを表す数学なんです。だからこの数学がなかったら、あの『マトリックス』は作れない。それぐらい我々の身近に入っているものです。

アインシュタインはやめておきましょうね。あんまり当たり前だから。光をもとにして、時間と空間が見た目とは違つていうことを証明する。我々が固定されていると思つていて時間や空間が、実はこれは相対的なものであるという概念ですね。

それからボーアによる量子論。これも時間がないから飛ばそうかな、もつたないけど。ご存知の方たくさんおられると思います。ミクロの世界、小さな世界を我々が眺めた場合には、我々がどう見るかによつて、ものがその見方に応じて現れてくるという非常に奇妙な説を裏証したものが量子論ですよ。普通だったら、このコップというものはコップとしか見えない。どう見たってコップだ。上から見よつが、下から見よつが、誰が見よつがコップだといふふうだと思つていて。ところが、これは大まかな世界ではそうだけれども、本当に細かいミクロの世界まで行つて細かい粒子のものを見た場合には、これは粒だと思つて見ると粒に見える。そして、これ

は粒じゃない、波だと思つて見た人には波だと見える。といふふうに、我々がどういふ立場でものを見るかによつて、その対象のかたちが、様子がかわつて見える。じゃあ、見てないときにはどうなるんですか、という質問が当然出ますよね。見てないときは、本当はどうなんです。答えは、見てないときには何もかもないと言つてます。何もかもない。つまり、見てないときには見えないうだけであつて、本当は何ですかという質問に意味がないということを証明してしまふわけです。これは恐ろしいことなんです。人間を恐ろしい不可知論の淵に突き落とすような考えですが、しかしそれはしょうがない。我々が人間という一つの特殊な生物として生きて以上は、その不可知論の穴から決して逃れることはできないということを証明したわけです。

二十世紀の科学を振り返つてみると、どの分野も全部みんなこれ「人間化」といふかたちで一本化できるように思ひます。つまり、ニュートンやガリレオの時代には世の中には神様がいて、神様がすべてを司る法則によつてものを動かしている。従つて、我々はその神様の創つた法則を見つけるんだというのが科学者の仕事であつた。神様というのは全てを見通して下さるから、一切不可知的なものがない。全てを見通す絶対者の目でものを見てゐるわけです。ところが、二十世紀になると神様がいないという概念が大きく発展するにとも

なつて、科学というものは神様の視点で見てみようがない。そんなものは見つからないんだ。人間の視点で見なければ、科学というのは本當に発展しないという大きな流れが出てきます。一つは相対性理論。つまり、相対性理論というのは、光よりも早くもつことを認識できない人間という生物にとつての物理学です。もし人間が目ではなくて、光よりももつと速い媒体でものこの因果關係を理解することのできる動物だつたとしたら、相対性理論はまた違つたかたちになるんです。僕たちは、例えばコップを落として割れるという因果關係、コップを落としたから割れるんだという因果關係を理解するとき、必ず目で見て理解をする。つまり、光でものの因果關係を知るわけです。光よりも速いもので因果關係を知ることが絶対できません。そこに、光というものが我々人間を制限する、一つの枠ができてしまつてゐるわけです。で、その光というものを一つの枠として作り上げた物理学が相対性理論なので、神様にとつては相対性理論はこれは間違ひなんです。神様は光を使わなくても、何かが起こつたらその瞬間にそのことが分かるわけです。そこから光が飛んでこなくてですね。つまり光が飛んでくるのにかかる時間がいらんということ。そういう目でものこのことを見ていたら相対性理論はできませんよ。それはニュートン力学です。

量子力学もそうです。人間だから、人間が見るといふ行為

を行つたからこそ、そこに波や粒が現われるのであって、見なかつたら、見ないときには何も無いんだ。神様ならあるんです。神様だったら、「わしが見てないときも、わしの創つた世界はちゃんとあるよ」と言えますが、我々人間はそれが見えない。ほかにもね、数学もそうですし、すべての科学は二十世紀に不可知論へと進んでいっていると思います。

その不可知論の中で唯一まだ元氣なのが生物学です。生物学では、クリックのセントラルドグマ、いわゆるDNAからRNAが生まれ、RNAからマミノ酸の結合ができて体ができるといふ原理が解明されたことによつて大革命が起こりました。要するに、設計図から体ができてくるのはどういふ仕組みなのか、ということなんです。これも大きなパラダイムシフトで、我々は今や生命といふものは自分でつくれるものだといふ意識までもつています。皆さんもそう思つてゐるでしょう。よく言つただけでも、昔は子どもといふのは授かりものといったんですよ。たまたま偶然与えられるものが、子どもだと。だから授かりものだから、自分たちの意志はそこには投影できない。つまり男がほしいとか、女がほしいとか言つてもしょうがない。天が決めることだから、男でも女でもかまわない。頭がいい子がほしいと思つたら、全然良くない子ができた。しかし、それは授かりものだから、我々の力ではどうにもならない。ところが、このセントラルドグマ以来進ん

でいる分子生物学の結果、生命は我々のデザインによつて自由につくれるという概念が皆さんの頭の中にも生まれてるんじゃないですか。子どもは産み分けができます。悪い要素は最初から遺伝子治療で治しておきます。今にきつと顔だつて直せるようになりますよ。美男子の顔の子をつくらうとか。つまり、子どもは授かるものではなくて、自分でつくるものだといふ意識がもう我々の頭の中にすでに生まれつつあります。これも、まあいいか悪いかは別としても、壮大なパラダイムシフトの結果を我々が知らず知らずのうちに受け取つてることになる。で、この生物学もまた今は元氣ですけれども、しかし流れからいふと、つまり、物理学や数学やあるいは化学がどんどん不可知論の中に入つていく流れからみたら、必ず生物学も将来不可知論に入ります。つまり、人間だからもうこれ以上は分らないという限界が示されてしまふわけですね。今、生物学は分子レベルを研究してますが、やがてこれ原子レベルにまでいきます。すると当然そこに量子力学が入ってきますから、不可知論になりますよ。そういう本もこの頃ちらほら出てくるようになって、面白いなと思つてゐるんですけど。

こんなふうには、一応、資料の八まで言つてしまいましたが、パラダイムシフトというのは、いかに重要なものであるか、これを我々が認識していないと、思わぬ畏にはまるというこ

となんです。つまり、今当たり前だと思つてゐることが、実は本当は当たり前じゃないかもしれない。我々がある分野で学問をする以上は、その学問の本当の姿をできるだけ我々は知りたいわけですから、そのときにそついつ先入観が頭の中に入つてしまつていたら、辿り着けるところに着けないといふことになる。

その一番いい例が仏教学の場合には、喜永仲基です。これが一七二五年から一七四六年、これ引き算して二〇年。びつくりしますよ。死んだのが三十一歳。この仲基は『出定後語』という本を書きました。書いたのは二十四歳のときです。大学でいつと修士論文ですよ。とんでもない話ですよ。もちろんそれまでは、何千年といふか千数百年にわたつて、經典といふものはお釈迦様がお説きになつたものである、題名にお経とつくからにはこれは釈迦の直説であるといふことをみんなが考へていたわけです。ところが、そのお経の中にはどう考へたつて矛盾するようなことがいっぱい書いてありますよ。例えば、阿含經と密教經典をくらべてみれば、どう考へたつてこれは言つてゐることが違いますよ。それはどうしてだろつか。しかし、そついつ問いかけをした人の頭の中には必ず、でも全てお釈迦さんが説いたんだといふ前提があり、これは崩れない。その枠組みの中でなんとかこの問題を解決していこうといふわけです。難しいですね。

そうなる。そうするといろんな理屈が出てきます。例えばお釈迦様が説いた教へは、説いた時期によつて違ふんだとか、説いた相手によつて内容を変へてゐるんだとか、いろんな解釈が出てくる。しかも、そこには、その説を唱へる人が一番信奉してゐるお経を一番上にもつていきたいという思惑が働きますから、またいろんな説が出てくるわけです。結局はそれが一種の仏教学として、それまですつと行われたわけです。つまり、お経は全部お釈迦様が説いたんだけれども、それをどんな順番で説いたんだろつか、あるいはどんなつもりでこついつ違つたものをお説きになつたんだろつか。それを説明せよ、といふのが仏教学者に、まあお坊さんですけど、与えられたひとつの絶対的な命題であつたわけです。それを解くことが仏教学の仕事だ、といふふうに大方思われていたわけです。ところが、喜永仲基が現われて、お経を全部読んだ結果、これは違います。一人の人間が説いたものじゃありません。私の考へるところによれば、お釈迦様が説いた可能性があるのは阿含經だけです。後の大乘仏教と呼ばれる仏教の經典は、これは全部後の人が書いたもので、しかもそれは、長い時代の間に、あるお経があるとそれに基づいて次の時代の人がまた書き加へて違つたお経にしたのです。それをもとに、また次のお経にしたといふ具合に、長い年月の間に多くの人の手によつて作られてきた。それがお経です」と主張するよ

うになった。もちろんその当時この考え方はほとんど仏教界には承認されなくて、むしろそれを喜んだのは国学者と呼ばれる人たちで、平田篤胤なんかがそれを喜ぶわけですけれども。ともかく、これはとんでもないパラダイム転換なんです。それまで絶対的な命題として枠組みになっていたものが壊れてしまった。そうなった途端に、今まで一生懸命に經典を順番に並べて、これはこんな順番だ、お釈迦様は四十のときこれを説いて、五十のときにこれを説いてと、一生懸命議論してやってきたことが、皆ばたばたつと崩れていくわけです。これは恐ろしいパラダイム転換ですね。

我々はその延長にいます。だから、私がここで『法華経』も『華嚴経』も『般若経』も、あれ全部お釈迦様が説いたんじゃないんですよと云つても、誰も怒りませんね。怒る人いますか。私はそうは思わないという人いますか。いてもいいんだけども、大体は百人が百人、「うん、なるほど」と言いますね。それは、このときのパラダイムシフトを我々が受け継いでいるからです。もちろん、富永仲基以前に積み重ねられてきた様々な研究がそれで無に帰したのではないんですよ。これはくれぐれも注意しておいてください。パラダイムシフトというのは、それまであったものを全部無駄だといって切り捨てて新しいものをつくるんじゃないんですよ。違うんですよ。それまで積み重ねてきたものは、そのままそこにあるんだだけ

れども、それをさらに上の次元から全体を包括するような、それよりもさらに上の段階の視点を獲得することです。ですから、その上の視点に立っていても、今まで積み重ねたことは、全部これは有効です。ただし、その情報の見方が違うわけです。扱ひ方が違ってくるわけです。例えば、相対性理論が出てきたからニュートンのやったニュートン力学は全部ゼロになったか。とんでもないです。ニュートン力学は相対性理論の中の、ある一つの特殊な場合として有効に機能するわけです。ですから、富永仲基が、仏説と呼ばれていた經典は全部これは非仏説であると言ったとしても、それまでの間に經典同士の関係や、どのようにそれが発展していったのかというような知識を積み重ねてきた、それまでの仏教学は全然無効にはならない。ただし、それをお釈迦さんという一人の人間の枠から、長い歴史の中へと移し変えたにすぎないわけです。しかし、それは大いなる学問の進展ですよ。

今日言いたいのは、じゃあこれから我々にそんなことができるんだろうかということですよ。しかし、学問をやる以上は、それは我々の最終の目的ではないかと僕は思うんです。何のために仏教学やるんですかってよく聞かれるんですけど、社会人の人達なんかによく聞かれるんです。そういう人たちは、きつとあんまり人生楽しくなかったんじゃないかと思えますけどね。例えば、私は映画が大好きですという人がいて、あ

なには何のために映画を観るんですかって聞いてもあんまり意味のない質問ですね。これは私にとって無上の喜びだからです、というのが一番いい答えだと思っんですがね。仏教学という学問の場合も、やっぱりこれは楽しいものなんです。学問というのは、やってて良かったと思っんですね。他の人に分けるのもつたいないくらい楽しいものです。しかも、仏教学というのは他の学問にくらべて、とてもすぐれた学問だと思っます。僕は学問にはレベル差があると思っっています。優れた学問と優れたくない学問があると思っっています。誰にも言わないことになっているんですけど、でもちゃんとそこにはレベルの差があると思っっています。本当言ったら、僕は数学を一番上にもつていきたいんです。物理学、数学というような、そんなものをもつていきたいんです。ただそれは、積み重ねの必要な学問なので、私なんかもつこの年になっては無理ですけども。ともかく、そういう学問の中で、じゃあ仏教学のランキングはどのへんまでくるかというところ、人文科学系の学問の中では僕はトップクラスだと思っます。トップクラスですよ、本当に。なぜならば時代が三千年以上ある。空間的にはユーラシア大陸半分を覆っています。そして、その仏教に関わつてきた人は、まあ言ってみればその時代のエリート達が多い。つまり、何にも考えない人たちが作つてき

た世界じゃありません。一生懸命考えて知恵を絞つた人たちの痕跡がずつと残つてきている。こんなの珍しいですよ。そして、たくさん資料が残っている。これ全然資料が残つていなかったら、全て推論で終わつてしまつから証明できないですね。ところが、資料があるから、ある仮説を立てたときに、それを論証することができる。つまり、科学としてもっとも重要な論証性があるんですね、仏教学には。これだけの条件をそろえた人文系の学問の領域というのは、そんな滅多にないと思っます。

ただの歴史学でもないんです。歴史はもちろん中心になるバックボーンだけれども、歴史の上にはちゃんと思想もつかっている。しかもそれは、ユーラシア大陸の右半分の優秀なる人々が三千年間の期間にわたつて積み上げてきた思想です。その痕跡を我々は探ろうというんだから、これは学問としては非常に洗練されたいい学問なんです。ですから、この富永仲基のパラダイムシフトが起こつたのは、まあ起こるべくして起こつたというのか、パラダイムシフトが起こるほど、仏教学というのは洗練された学問だということなんです。これ私が頭の中で考えている洗練されていない、あまり良くない学問の領域だと、パラダイムシフトは起こりようがないんですね。いろんなところから情報だけ集めてきて並べてみせました。あつちのこれとこつちのこれと似てます」って言われ

ても、似てるといにはあるかもしれんけども、本当にそんなのか論証してみなさいよと言われても論証の方法はないんです。そういうふうな考え方を積み重ねていって、それがあるとき突然視点が変わるのか。もともと獲得しているしつかりした視点がない場所や、視点をしつかりと確立していない領域で視点の転換なんてものは、起こるはずもない。仏教学にはそれが起こりえたという、これはだからこの高永伸基の事例は、我々にとっては非常にありがたい、心強い励みになるわけです。

では、我々にもパラダイムシフトはできるのか、ということですよ。そんなことは私は知りませんよ。できるんだしたら、自分でやっていますから。ただ、こういうふうにやったら、できるかもしれないという、ぼんやりとした思いはある。資料の二頁目の真ん中よりちょっと下のところに、コメ印で書いておきました。これが私が言いたいことです。パラダイムシフトは、必ずしも大きな問題を設定するところから出発するわけではない。つまり、漠然とした大きな視点で、世界観を変えてやろうなんて思ってやりだしたら、だめだということですよ。例えばですよ、さっきの話ですが、分数と小数とどっちが多いでしょうか。これを決めてやろう。よし、決めるぞと、一日机の前に座ってずっと何も見ないで考えてたって、そんなもの百年座ってたって答えが出るわけじゃないですよ。

ね。つまり、パラダイムシフトというのはそれが起こることによって、ある非常に重要な問題は解決されていくんですが、その問題を最初にもってきて、よし俺はこれを解いてやるぞなんて言って取っ掛かったって、絶対に先には進めないということですよ。目先の仕事は細かいんです。やるべき仕事は非常に細かい。実質的な仕事です。しかし、その実質的な細かい仕事をやっているなかで、パラダイムシフトが起こっていくわけですから、それを承知していないと、方向が逆になっちゃいます。方向が逆になっちゃうと、その人は一生を棒に振ることもなりかねない、ということなんです。むしろ目先の些細な問題を扱ううちに、その奥に基礎的問題の存在が浮かび上がってくるという経過を取ることが多いということですよ。もっと簡単にいうと、先人たちの上に乗らなければ、パラダイムシフトは起こしようがないということですよ。

こんなこと言つと怒られるんだけども、学問するときにはやっぱり都会にいなくちやだめです。田舎はだめ。田舎ってというのは、東京から離れてるっていう意味じゃないですよ。そうじゃなくて、学問の最先端の情報がそこにあるような場所に身を置かねばならんということですよ。これはもう、どれ見てもそうです。このパラダイムシフトのどれを見て、何もないところ、情報がなく、上に乗っかるような土台のない

ところで、突然誰かが何かやったなんてことは一度もないです。「郵の三年、都の昼寝」と言うけれども、自分をその情報の最先端の場所までもっていくのも、これも実力のうちだと思えます。ですから、パラダイムシフトを起こすときにいくら自分一人で頑張ったってだめ。やっぱり、そこに身を置いて、それまでにどんなことが行われてきたのかという土台をしつかり踏まえた上で、自分のオリジナリティをもっていくというやり方をしないとだめです。他に道はないと思えますね。

繰り返して言いますが、最初から抽象的大問題に関わることは危険なんです。重要なのは、現時点で自分の行っている作業が、どのような基礎的問題に関わり得るかを常に認識しておくことだと思います。つまり、やっている作業は細かいんです。自分のやっていることは、ひとつひとつの問題を解いていっているだけです。ただし、その問題が解けたら、一体その問題はどこまで発展するんだろうかということをも知ってないと、その作業の方向性が狂ってくるということですね。きちつと方向性を捉えてないと。

ここからは、これはもう私の大風呂敷なので聞き流しておいてもらって結構ですが、近代仏教学における諸問題です。ここからが仏教学の話なんです、これだけが大風呂敷なんです。

例えば、大乘仏教の起源は出家が在家かという問題は、いま大変ホットな話題になっていて、面白いところです。これなんか、平川先生が現われるまでは、大乘仏教は大衆部から出てきたんだという通説が一般に行われていた。それを平川先生が物の見事にひっくり返して、在家起源説という全く新しい学説をつくり出す。これによって、またパラダイムが多少は変わったと思いますけど、それが最近になってまた再逆転して平川説は今や崩れつつあるということ、非常にホットな領域です。これはこれから本格的な議論が進むことが間違いない保証されている領域なので、そういう点では面白いかもしれません。

それから二番目。釈迦は実在の人物であったか。これだつて、仏教学者はみんな釈迦さんは実在の人だと思っていいけれど、証拠なんかないですよ。証明できる一番重要な証拠は何かっていうのを考えてみましたが、やっぱりアシヨーカ王碑文しかないね。アシヨーカ王碑文が一番お釈迦さんの時代に近い資料でしょうけれども、その中に釈迦、つまりカウタマシッタールタという人物の実在性を示す情報があります。例えば、ルンビニーに、記念碑を建てた、なんてことがありますね。ルンビニーっていったら、もちろんお釈迦様の誕生の地ですから、そこに記念碑が立っているということ、アシヨーカ王は少なくともお釈迦様という人物を実在の人物

として認識していたんでしょ。ですから、そこまでは認められるけども、本当にその間の空白が埋められるかどうかはわからないですよ。そんなと思うかもしれませんが、私もそんなと思つんですけども、でも、こういうことは、疑問に思つてないといかんです。私も十中八九いたと思つんですけどもね。でも、残りの二がある以上は、これはやっぱり心の片隅にこういう疑問をとどめておくと、いつの日かこれがまた大きく花開くこともあるかもしれない、というわけです。

ここからあと下に書いたのは、みんなそんな話題です。一応読んでみましょうか。釈迦は本当に仏教世界の中心人物であつたのか。これはよく言われますよね。教団のリーダーは舍利弗じゃなかつたのかと。お釈迦様はたまたま生まれが良かったから、血筋のいい宗教ということで、知恵者たちに使われた繰り人形じゃなかつたのか、という考え方も無きにしてもあらず、ということですね。ジンギスカンは義経だつたみたいなものですね。ジンギスカンは実は義経ではなくて、弁慶だつたらしいですね、本当は。大きな体で、表に出るときには弁慶が出て行つて、義経は裏でそのジンギスカンを操つていたらしい、という話ですけど。

それから、「結集、根本分裂、枝末分裂」という歴史的な事件は本当に起こつたのか。これは、私はもう非常に疑問視してまゐります。根本分裂という事件があつたかどうか、そんな証拠全然

ないです。まあ伝説にそう書いてあるんですが、伝説なんていうのはそれはずっと後の話だから信用できない。しかも、伝わっている資料によつて言つておはらばらで、違つてるとを言つてお。これを信じてる人の根拠はわかるんです。なぜかと言つて、後代の資料を見ると、ちゃんと碑文とかいろいろなものに、何々部、例えば法蔵部とか、説一切有部とかという名前が出てくるから、「ちゃんと部派はあるじゃないか。部派がある以上、部派ができていたことは確認できるんだから、その大元になつた根本分裂はあるに違いない」という考え方です。でも、そんなことないですよ。部派があるという事実があつたからと言つて、その大元の原因が根本分裂であつたという証拠なんかどこにもないです。そうでしょ。逆に言つたら、部派がたくさんあるので、どうしてこんなに仏教は分かれたんだらうって考えた人が、後で「きつとそれは最初に二つに分かれて、それからまたいつばい分かれたに違いない」と考へて歴史をつくつた可能性もあります。ですから、この結集や根本分裂という、分裂の歴史をそのまま頭で信じて仏教史を構築していくということは、非常に危うい仕事だらうと僕は思つておいます。これ無しでいつべん考えなおしてみてもいいんじゃないかと。つまり部派があつたことは間違いない、部派ができたことは間違いないけども、部派ができるにいたつたプロセスは決して歴史書のようなものじゃ

なかつたという可能性も、十分考えておくべきだと思えますね。

それから、「經・律の二藏は、本当に仏教の絶対權威として作成されたものか」。特に律です。律は、絶対にこれは変えてはいけないお釈迦さんの、つまり仏教の真理として説かれたものなの。それとも、そんなたいしたものじゃないよと思いながらお釈迦様が説いたのか、という問題です。今の時代の人たちは、経も律も釈迦の直説だから絶対守らなきゃいけないって言ってます。特にスリランカやタイのお坊さんたちはそう言ってます。そのために今の南の仏教はくちやくちやになりつつありますよね。たとえば、比丘尼の問題、東南アジアでは約千年前に戦争が起こって、つまり国が乱れて、お坊さんの数が極端に減ってしまいました。そして、ある時に比丘尼の数が十人よりも少なくなつた時期があります。律の規則によるならば、新しい比丘尼をつくるためには十人以上の比丘尼が、それを承認しなければならぬ。さらにそれを十人以上の比丘が承認しなければならぬという規則があります。そのような承認のための儀式を授戒といいます。そして、比丘尼の数がいったん十人よりも少なくなると、その授戒儀式の執行が不可能になるわけですから、もう二度と比丘尼をつくることができなくなるんです。千年前に実際にそういうことが起こつたので、東南アジア、スリランカにおいて

は、その後、比丘尼をつくることができなくなりました。今もそうです。ですから、南の国には比丘尼はいないんです。女性のお坊さんはいませんが、比丘尼ではなくて、比丘尼になる前の段階の見習いとしてしか承認されていません。比丘尼は一人もいない。それは何でかというところ、律の規則が絶対だからです。十人以上の比丘尼が認めなくちゃいけないということをお釈迦様が言つたから、これは仏説だから、絶対の真理だからというわけです。なぜ十人なんですかなんて誰もきかない。十人って決めたんだから、これはもう絶対だめなんだっていうことで、がちがちの人たちはそれ以後、比丘尼を一人もつくることができなくなつた。それに対する最近の救済策としてどんなことがあるのかというと、南の国では比丘尼がいなくても、北の大乗仏教圏には比丘尼がいるではないか。その比丘尼たちが十人集まれば、その人に許可してもらえば、十一人目の比丘尼として新しくつくれるじゃないかというわけで、スリランカの女の人たちが台湾や韓国の尼さんたちをお願いして、授戒させてもらうんです。そして授戒儀式を受けて比丘尼になつたらスリランカへ戻って、そこで新たに比丘尼僧団をつくり出すんです。ああ良かった、これでもうめでたしめでたしと思つたらとんでもない。帰つてきたその比丘尼たちは全て大乗仏教徒になって戻ってきてるんです。そうやって戻ってきた人たちが何て言つて毎日唱え

ているかという、南無阿彌陀仏と唱えていますよ。それを知ったスリランカの人たちの中には、これによって今まで營々と培ってきた上座仏教の流れが乱れてしまふ、崩れてしまふといふことで、それに猛烈に反対する一派が生まれる。一方では、そんなこと言つたつて、今までその規則を変えなかつたがちがちのあんたの方が悪いんじゃないかと言つて、その台湾授戒を擁護する派に分かれる、といふことで、おそらくこの問題はやがて南方上座部仏教を二分する大問題になつていくはずだ。今そのちよつと途中にあります。

僕の意見を言ひましょうか。どつちも馬鹿げてるね、これは。つまり、彼らの考えの大元には、律といふものはお釈迦さんの直説だから絶対変えることができないといふ概念があるけども、律といふのはこれは法律なんです。いろんなところで僕は言つてるんだけど、律は法律だ。お釈迦様がサンガ、僧団といふ一つの組織を運営していくために、つまり外界の世界から非難されない立派な集団として承認させるためにつくつた法律ですから、法律といふのは時代によつて変わるべきものなんです。変わらなかつたら、それは法律じゃないんです。現にお釈迦さんは遺言の中で、細かい律はやめてもいいとちやんと言つてます。これ本当か嘘かは知りませんが、お釈迦様が本当に言つたかどうかは、僕は知りませんが、少なくとも律が法律である以上は必ず改定することができる

といふ認識をもつた人が当時いたことは間違いない。その人がその記事を書いたわけだから。ところが、それがいつの間にかやらお釈迦さんの言つたことは、全部これは仏説だから変えてはいけないんだ、といふとんでもない權威主義が仏教徒の心を支配するようになって、そして、律と經がどちらも同じレベルとして絶対化されていくわけです。その拳句の果てがこれです。律といふものが法律だといふ一番の根底の原理にまで立ち返つて考えるならば、今のその、比丘尼がどうしたなんていふ問題は、まずその律をどうするんだといふところから話が始まるはずなのに、ちつとも始まらない。恐ろしいですね。

今日はパラダイムシフトの話をしてますけれども、もし我々が机の上でやつてるこの仏教学が本当にパラダイムシフトを起こし得るとすれば、たとえばこつちの問題を我々のやつてゐる仏教学がきちつと解いてみせ、そしてそれによつて南方仏教の人たちの視点がころつと変わるというようないことが行われるような場合ですね。もし仏教学が世の中で何が最終的に役に立つとしたら、その形はそつちうもんだと思ひますね。ただ、それはできるかできないかわからないけども。だから、僕が今日こゝでパラダイムシフトなんて、さかんに繰り返して言つてますが、イメージとしては我々がやつてゐる学問としての仏教学がそつちう形で現実の働き、作用をし

た段階を想定してゐるんです。そこまでもっていきけるかどうかということですね。単に学説を変えるとか、今まで言つた説をひっくり返して新しい説を唱えただけでは、パラダイムシフトにならないんです。先に幾つかパラダイムシフトの例を挙げましたが、これみんな僕たちが気が付かないうちに我々自身の考え方をコントロールしてますよ。単に物理学や数学の学説が変わつたというだけの話じゃなくて、それ以後の人たちの心が変わつていくんです。そういうことが仏教学に可能かどうか、というのが今日の大風呂敷の結論なんです。

あとはもう読むだけにします。六番、「パリー上座部は部派か、有部は部派か」。つまり、部派という概念をもういっぺん考え直してみたら、案外落とし穴があるんじゃないか。

それから、「大乘仏教は、部派仏教の対抗勢力であつたか」。いわゆる大乘仏教起源説にからんで教科書でよく言われているのは、「小乗仏教というのがありました。小乗仏教の人たちは保守的で、自分たちのことばかり考えて、みんなを救おうという広い心がありませんでした」。なんか悪人みたいだね、そんな風に言つと、「それに憤つた一部の人たちが皆を救うために大乘仏教というのをつくりました」。これだと本当に勸善懲惡で、悪い小乗仏教を大乘仏教が征伐したみたいに言われてますが、その中からどうしてもイメージとして部派仏教、つまり小乗仏教の人達と、それに敵対する大乘仏教とい

うイメージが出てきます。これはやっぱりもういっぺん全部元へ戻して崩して考えるべきでしょうね。ましてや大乘仏教が部派仏教の間から出てきたっていうんだつたらお仲間じゃないか、という気もします。つまり、部派仏教と大乘仏教の線引きというのは簡単にはいかんということですね。

それから、「大乘は小乗以上に利他的であるか」。どうですか。僕が言いたいのは、大乘仏教は小乗仏教よりも優れているという北方大乘仏教世界の先入観は、いっぺん捨てたほうがいいでしょうかという話です。まあ、こんなものは南へ行けば、南の人は逆のこと考えてるわけですから、大した展開にはならんかもしらんけど。

大乘が小乗より利他的だつていうときには、本来仏教が主張していたはずの業の原理を否定したならばという条件が必ず付きますよ。業の原理が厳密に生きている間は、菩薩の利他行なんていうものは不可能です。じゃあその中でどうやって他の人のために役に立つんだ。それは自分がやってきた体験を他の人にもちゃんと教えてあげて、つまりインストラクターすることが唯一の人助けになるはずですよ。それはお釈迦様が小乗仏教でやってることじゃないか、ということになる。ところが、菩薩行といつて、要するに業を他の人にも転換できるというような廻向の概念をもつてくるようになると、初めていわゆる大乘でいう菩薩行が可能になってきますが、そ

のためにはお釈迦様が考えた業の自己責任性という大原則を否定しなければならなくなる。つまり、「菩薩行やりますか、仏教やりますか」というごちかの選択になるわけですね。それで、仏教やめて新仏教になったのが大乘仏教だと考えると、大乘仏教が利他的だなんて言って、それで威張ってるわけにいかんのですね。

だんだんなんか、皆さんの中に反感をもつ人が出てきたりして、怒られるかもしれないけど、ともかく続けましょう。例えて言うと、経典にはよく川を渡る喩えがありますよね。それで、僕がつくった喩えが一つあるんです。渡し場へ行きました。するとこちらには巨大な、大きなフェリーボートがあつて、何百人でも乗れますって書いてあります。こちらには小型の一人乗りのカヌーが何隻かつないである。どっち乗りますかっていうわけですね。見てみると、カヌーの方は乗って向こう側に渡っている人がちゃんといるんですね。向こうに見えるんです。もうすでに渡っている人、お釈迦さんとかいるわけです。おーいって呼んでるわけ。ちょっと自分で漕ぐのは大変だけど、とにかく、「こっち来いよ」と言っているわけです。で、フェリー乗り場の方を見ると、そこには何百人でも乗れますと書いてある。ただし、今回が処女航海と書いてあるわけです。タイタニックみたい。向こう側へはまだ一度も渡ったことはないんだけど、ただ、とにかく

たくさん乗れると。さあどっちに乗るかということですね。答えはそりゃ人それぞれでしょう。でも少なくとも、フェリーの方が絶対いいと断言はできないはずですよ。フェリーつまり大乘側の人に言わせれば、大乘は一度に大勢の人を救うからすぐれているんだ。だからこそ利他である。だから素晴らしいんだというけれども、歴史的な人物として向こう岸に渡った人の実例を我々はもっていないわけです。小乗仏教の場合には、そのリーダーとしての釈迦という確かに悟った人物が現実にはいたわけで、その釈迦に従っていった一つの宗教集団がいわゆる小乗仏教です。ですから向こう岸に渡った実績のないフェリーが、たくさん乗れるからといって小乗仏教のカヌーを批判するのは、これは論理的におかしいんですね。そういう形で批判してはいけないのであつて、何遍か渡った後にね、渡した人数とか、そういうものを統計に出してくれたらよく分かるんですけれども、数字がないもんだから頭から信じてかかる以外に仕様がな。人を合理的に説得するだけの力がないということなんです。

九番、我々が仏になるという思想はどのような原理に基づいて現われたのか。これこそが大乗仏教という宗教を考える場合の、一番のキーポイントです。そして、仏になるためには何をしなければいけないのかという必要条件は何だったか。しかも、大乘仏教の資料ではなくて、大乘仏教が起こる前の

いわゆる上座仏教の段階で人々はどんな条件を考えたであろうか。それが大乘仏教を生み出していく一つの種になっていくわけですからね。そういう視点でこの問題を解いてみてほしいと思います。

あと、中観の空の思想が大乘仏教特有の思想かどうかかわからない。僕はこつこつのは苦手なんです、読んでみる限り、龍樹の思想と小乗仏教の違いがよく分からないんです。この領域に関して私は素人ですから、私の読みが浅いのかも知れません。ただ、龍樹が言っているからその奥に何か深みがあるとか、中観の空だからそれは深い甚深なる教えであるというような視点をいっぺん捨てて見てみると、案外小乗仏教での段階での教えをちょっと変えて言っているだけかもしれないという気もするんです。『ラトナーヴァリー』なんか読んでると、そんな気がするんですけれどもね。これは、ここに書かないほうが良かったかもしれませんが、勢いで書いてしまいました。

「仏教とインドウー教は本当に別個の宗教か」。これだつてそうですね。この質問が問いかけているのは、仏教とは何かという質問なんです。そして、もう一つの質問は、仏教つて一つですかという質問に転換していきます。つまり仏教とというのは一つの宗教ですかという質問に変わるわけです。答えはもちろん一つじゃないという方向に進むだろうと思いま

すが。

これは思いつくままに書いたもので、こつこつという視点をもってこの問題に取りかかったらいいと言ってるわけではないですよ。こんなもの一から取りかかったら変な方向にいつてしまいます。今我々が目の前に置いてやっている現実の研究というものが、こつこつした問題とどこかで接点をもつてあるかどうかというようなことを考えて研究していくと、こつこつ問題の解決に向かう方向へ進むかもしれない。そして、その問題の解決が何らかの社会的な影響をもってきた場合には、パラダイムシフトになります、それは運任せなので、その本人がどつこつしようという問題ではないんです。ただ我々はそういうものを最終の目標として、そうなったらいいなあと思っているほうが楽しくなるという話ですね。

今日はですから、仏教学はいかに楽しい学問となり得るかという話をしました。ちょっと長くなりましたが、これで終わります。ありがとうございました。